
World of Fantasy 改訂版

K_Sayuto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World of Fantasy 改訂版

【Nコード】

N7775Y

【作者名】

K | Sayuto

【あらすじ】

謎の大量失踪事件

その背景にあるものとは？

地球と異世界、敵と味方、疑いと信頼。それぞれの思いを載せたFantasyが動き出す。

プロローグ

―友人の失踪―

それまではただそれだけの事件であった。

―さらなる失踪―

そこで、何か集団的な組織が動いているのでは？と言う噂が流れるようになった。

―共通点―

失踪した人たちの共通点が見つかった。だがそれはとても信じ難い事だった。皆があるオンラインゲームやっていた、ただそれだけの事だった。

「なあなあ、あの噂聞いたかかみにゃん」

下校途中と思しき二人の制服に身を包んだ男が歩いていて片方が先に口を開いた。

「えー、しらなーい」

「ほらあの失踪事件だよ」

「あー、あれかあ。あれがどうしたのお？」

「俺たちもやって見ない？」

「いいんじゃない」

「おっしや、じゃあ帰ったらすぐスカ プ繋いでくれよな」

そしてY字路で別れた。

登場人物

シヨウ - 伊志井 将いししい しやう

今作の主人公、高校一年生。玲奈の事が好きだが告白などした事はない。オカルトや魔術が好きだったので魔法関連のジョブに就いたりする。

かみにゃん - 桂峰 神紅かつらみね しんく

シヨウの親友、同じく高校一年生。剣術には心得があったのでLVがあまり関係のないWOF内では相当な強さをほこる。

ティア - 桜ヶ丘 知さくらがき ち

いわゆるネカマだったのだが、WOFの世界に入ってしまった、使っていたロリキャラになってしまった。

ユーキ - 佐藤 勇季さとう ゆうき

シヨウの友達、同じく高校一年生。

レーナ - 阿久津 玲奈あくつ れな

シヨウの友達、同じく高校一年生。実はレーナもシヨウの事を思っていたり。

第一話 パーティー結成

その時はまだ信じられなかった。Lvが5に達した時に俺が持っていたはずのマウスは杖に変わり制服はローブに変わりPCの画面に広がっていた世界は今自分の周りに広がっている。

「は？」

第一声はそれであった。

「やれやれ本当にこんな事になるなんてなあ」

容姿は確かに変わっていたが頭の上に表示されたキャラネームは『かみにゃん』だった。

「かみ・・・にゃん？」

「おっ、シヨウ」

と不意に後ろから誰かの叫び声が聞こえた。

「な、なんじゃこりゃー」

その声は幼げなソプラノボイスだった。声の主を見ると先ほど出会って一緒にいた幼じ、げふんげふん、小さな女の子がいた。

「ティアアさん？」

暫くその女の子は放心ウヤシしていた。しかし、突然はっと意識が戻っ

たよつで急にこんな事を言い始めた。

「こんな幼女じゃハーレムなんて作れねえーよー」

そこで俺は気がついた。

「あのーティアさんはもしかして中身男ですか？」

「えっ、いやそんな事ありませんよ。お、わ、私は中の人も女ですよ」

「今俺っていおうとしてたよねかみにゃん？」

俺が問いかけると。

「そつだなあーシヨウ」

そこでティアは認めたのか。

「あーそつだよネカマだよ今じゃ男の娘だよ悪かったかー」

「まあ、いいんじゃないのか？」

とかみにゃんが言うので俺も肯定しておいた。

「そ、そつだ今なら女のアレが好き放題触れるじゃんか」

そつ言つてティアは胸に手を当てるがそこは断崖絶壁が広がっていた。

「そ、そんな。うそだあー」

「とりあえず、ティアとかみにゃん一目につかないところに行こう」

「んー、僕も賛成」

ティアはまた放心していた。俺たちは急いで一目につかないところへ逃げ込んだそこは小さな洞窟だった。

「ん、あの奥にいる人誰だろ？」

かみにゃんが気がつき俺も気がついた。とりあえずティアはそこからへんにおいておいた。

少しずつ近付いて行くと、その人の頭の上にあるキャラネームが見えた。

「『ユーキ』ってまさかあのユーキ？」

そこまで俺が言ったところで、後ろから誰かの声が聞こえた。

「さあ、追い詰めたわよさあさつさと降参しなさい」

と女の人が入ってくるがこっちを見て驚愕きょつがくした。

「え、シヨウとかみにゃんってまさか？」

「だ、誰だッ！」

俺が叫ぶと、その人は答えた。

「私だよ阿久津 玲奈だよ」

「れっ、玲奈さんー？」

俺が驚きの声を上げるとユーキが目を覚ました。

「いてて、わりい取り逃がした。ん、こいつらは？」

「名前見て気がつかないかなあ？」

「ああ、お前らもか。悪いけど肩かしてくれないかシヨウ」

「ああ、お前やつぱ勇季か？」

「そーだ、そーだ、クリームソーダ」

「……………、多分今ので体感温度5度くらい下がったかな？」

「そう言えば、そのティアってひとはどなた？」

そう聞いた時、ティアは焦っていた。しょうがない、助け舟を出してやるか。

「えっとな、こいつは先ほど出会った女の子だ。どうやら何かの事故で記憶を失ったらしいんだ。だから今はなんもわからないからレーナさんから教えてやつてくんないかなあ？」

俺がそう言うとティアは小声で

「何でそんな設定なんだよ」

「そっちの方がいいだろ、過去とかいろいろ詮索されずに済むし第一、お前は元男なんだから女の子の事を知らないんだからそれを隠すためでもある、後これからは男口調を絶対使っな」

そう言っただけで俺たちがコソコソ話していたのを見たレーナさんは口を開いた。

「なーに、コソコソやってんだかまあいいけど。ところで、一応聞いておくけど、これから私たち仲間になるのよね？」

「まあ、そりゃ一緒の方が安全だろうしねえー」

今まで黙っていたかみにゃんが話す。

「でも、幸いな事にこの世界はLvはあまり関係ないから装備と個々の能力、それにジョブとコンビネーションさえしっかりしてれば何とかなる。っと、もう大丈夫だ一人で立てる」

「えーと、とりあえずみんなのジョブをまずは聞いておかなくちゃだね。私は魔銃士スベルガンナーでユーキは魔法戦士マジックナイトだよシヨウ達は？」

「俺は、とりあえずは治療師ヒトラーでかみにゃんはサムライでティアは……なに？」

「えっと、お、私は……何だろう？」

「ポケットに携帯入ってない？この世界ではどうやら携帯がウィンドウの代わりになってるから」

「あつ、ほんとだ」

ティアがポケットから出した手に握られていたのはスマートフォンだった、いわゆるスマホだね。

「ええと、きり……さき……し、ミストスラッシュャー霧裂師だ！」

「!!!」

「嘘だろ、霧裂師ってスーパーレアジョブで100億人に1人出るかどうかってジョブだろ」

「そう言えばユーキとレーナさんはこの世界に詳しいみたいだけどうして?」

「ああ、それはだな」

「いい、私から話す。この世界はWOFとほぼ同じ世界、というかほとんどの事が全く一緒なんだけど少し違う世界なの」

なるほど、それでさっきまでいろいろ知ってるような口ぶりだったのか。

「じゃあ、俺たちが持つてる知識でもある程度はもう通用するって訳か」

「そうそう、それで……。続きは宿屋でしましょう」

そうレーナさんが言った後に当たりを見渡すとティアとかみにや

んは寝ていた、しかもかみにゃんは立ちながら。

「それもそうだな、ティアはレーナさんが頼む、シヨウはかみにゃんをたのむ」

そう言ってユーキはヨロヨロと立ち上がり歩いて行った。俺たちもその後を追いかける。

World of Fantasyとは？

とあるオンラインゲームの名前で今回の冒険の舞台。略称は『W
OF』

システムは一般的なLv性だがLvが上がってもステータスは対して変化はない、Lvが上がれば新たに技を習得するぐらいである。

だからLv1でもテクニクさえあればLv10にも50にも勝てると言つ事である、あくまでスキル使用禁止での話だが。

主にステータスはジョブによって何かが高くなり何かが低くなるものである。それ以外のステータスの変動は装備品が強化魔法、または何らかの加護以外では基本的にあり得ない。

ジョブは数が豊富でざつと200を超える、そのうち大体20位がスーパーレアジョブ、つまりユニークジョブである、霧裂師もこの中にはいる。

とまあ、この辺りまで後は基本的なオンラインゲームと同じである。

種族

ヒューマン
人間 属性：大地

全てのステータスにおいてバランスの良い種族、基本的にどんな装備でも上手く使える。

ケット・シー
猫人 属性：星

猫本来の身軽さにより俊敏力、回避力がずば抜けて高く攻撃力もある程度あるが防御は低い。主にクローなどの武器を使う。

ファンゲラー
犬人 属性：炎

攻撃力、俊敏力に長けていてヒットアンドアウェイの戦法が得意。犬の種類によって特性が変わっているので場合によっては連携が得意になる組み合わせなどがある。

ヴァンパイア
狼人 属性：風、月

攻撃力、回避力、連携がとて高く速攻撃タイプ。連携がとて得意で知能も高い。

グリジフィクス
熊人 属性：大地

攻撃力、筋力、防御に優れていて、パーティーの主力となる存在。

ドワーフ
怪力人 属性：炎

その体からは想像できないほどの怪力を持っていて、指先も器用なので生産などもお手の物。

妖精^{エルフ} 属性：風、水

人魚の様に魔法、弓に長けている種族。あまり数は多くない。

人魚（マーメイド or マーマン） 属性：水

女の場合はマーメイド、男の場合はマーマン。魔法や弓の扱いに特化してる。普通は人間の姿だが、水に触れる事により人魚の姿へと変わる。

翼人^{ハービィ} 属性：風、天空

野獣化が使用可能な種族で使うと背中から羽が生えるが生える時の痛みは相当な物でありやりたがる人はいない。

聖人^{セント} 属性：聖、太陽

賢人に劣るが相当な知識と頭の回転力を持ち近接も可能な魔法戦士っぽい種族。

賢人^{ムトフライブラリィ} 属性：無

戦闘においては役立たずだがその頭の知識、回転力は群を抜いているので、策士などの役目を与えると真価を発揮する。

竜人^{ドラゴニカ} 属性：炎、天空

熊人の全てを上回る大変希少な種族。どんな戦いでも勝利へと導く勝利の女神の加護がある。

エンジェル
天使 属性：聖、風

悪魔と対をなす種族。魔法においては攻撃系よりもサポートに特化しており近接でも十分戦える。

デーモン
悪魔 属性：闇、炎

天使と対をなす種族。魔法においては攻撃系に特化しており。禍の象徴として恐れられている。

アポストロフイ
神人 属性：神

神以外で神に果てしなく近い種族。現在もその種族の末裔がいるかどうかは不明。

ロリ
幼女 属性：ボクツ娘

大っきいお友達に人気な・・・冗談です、すみませんWWW

どの種族も見た目は人間となんの変哲もないが妖精や猫族などは少し小柄なほうで、竜人や熊人は大柄な方であると言う事だけ。動物系の種族は野獣化、竜人は半竜化、神人は半神化などを使う事により本来の姿へとなり種族の特殊能力のアップやステータスの飛躍的向上などが起きる。

野獣化を使用できる種族は興奮状態に陥ると半獣化状態になり、猫

の場合人間×猫耳×猫尻尾状態になりその種族の特性が目立つようになる。

第二話 覚醒、チートスキル

「と、まあこんな感じかなあ」

俺はレーナさんに聞けるだけの事を聞いた。

「現時点では何もヒントはない・・・か」

「え、なんの？」

俺は一泊おいてその問いに答える。

「いやあどうやれば元の世界に帰れるのかって事、まあ普通に考えれば魔王を倒すとかそのあたりなんだろうけどさ」

「えっと、その事なんだけど今日シヨウくん達に会う少し前に怪しい奴らがいて追いかけてたんだけど・・・」

「その途中で逃げられ、ユーキもやられた・・・と？」

「うん」

暫く沈黙が続いていた。

じゃあ、あいつらを捕まえるってのが当分の目標かなあ。

「じゃ、話は簡単だそいつらをぶっ潰す」

「いや、ぶっ潰しちゃダメでしょ」

レーナさんが慌てて正す。ってかかみにゃんおきてたのかよ。

「捕まえて情報を、つてもう寝てるよ!？」

「ははは f ^ | ^ ;)」

翌朝

「みんな聞いてっ、昨日シヨウウくと今後の事を考えた結果・・・
3日よ、3日でパーティーのコンビネーション及びLv上げをする。
そしてその後は例の奴らの搜索」

「別に僕はなんでもいいよぉー」

「俺も異存はない」

俺も異議ないよな？

「異議なし」

「多分大丈夫」

「それじゃ、トレーニングよ」

1時間後

「ハアハア、まだ終わってないのか？」

俺たちはいきなりながら死に直結するかもしれないミスを犯して

しまった……それは。

「もうっ、なんで3人とも装備初期状態でしかもモンスターハウ
スにはまるのおおお」

「ふんっ、だが僕の敵ではないっ」

そう言っつかみにゃんは初期装備のショートソードを片手に敵の
ど真ん中で暴れまわる。

「かみにゃん、へるぶみぐ。ヒーラーがどうやって一人で10体
もあいてしなやならんだあー」

「だが断るっ」

かみにゃんはそう言って髪をかきあげる。そんな事してないで助
けてマジでやばい。

「いや、残りHP5なんですけどっ」

「ええい、ヒールガン」

レーナさんの杖銃フレイルガンから緑色に輝くHP回復効果を持つ光が飛んで
きて、敵にあたる。

「あっ」

あっ、じゃないよあっじゃまあ期待してなかったけどぞ。

「ええい、秘技、ポーションがぶ飲みー」

「やばいよお、このロリの体がひめいをあげてるよお。もうげんかーい」

そう言っでティアが床に伏せる、いわゆる死んだふりだ。

「ティアーお前もたたかええー」

「いやだあー、なんもスキルないんだもーん」

そう言っでいると。

「ティア、レベルアップ L V 1 5 スキル習得 スキル名《霧^{バスタ}鎌^イ鼬^{スラッシュ}》」

と、ティアの端末からのアナウンス。

「ああもっつ、いづくぞおー霧鎌鼬」

ティアがスキルを発動すると、ティアの周りに霧が立ち込め、急に霧が四方八方に弾ける。弾けた霧に触れたモンスターは触れた部分から切れた。そして、見事に20体はいたであろう魔物は全て肉片となった。

「レベルアップ L V 1 スキル習得」と言うアナウンスがいたるところできこえた。

なんだよそのチートスキルはー

第三話 心が読める青年

あたり一面魔物の屍骸。どんなチートスキルだよと思いはなつたティアに視線を向けると。

「ハアハアハア、うっ」

ティアは胸に手を当てて息が切れていたかと思うと急に倒れた。

「ティアっ」

俺はすぐに駆け寄り受け止める。

「ティアちゃん？」

遅れてみんなが集まってくる。俺はティアの心臓部分に手を当てるとトクントクンと確かに心臓は動いていた。

「一体なんなんだ？」

俺の問いに答えたのはユーキだった。

「強力なスキルにはそれ相応の精神力が必要だから、耐えきれなかつたんだろう」

「そっか、まあ助かったな」

俺はティアを担ぎそのままみんなと一緒に戦い始める。

《ティア編》

目が覚めるとあたりは真っ暗でベットの上だった。

そっか、あの時に意識を失って。

私は宿屋からでて少し風にあたるために外へでた。

「わあ、綺麗」

空には星がたくさん光っていたが視界の左の方に人影が見えた。

「よっ、目が覚めたか」

そこにいたのはシヨウウだった。

「なんだ、シヨウウか」

「俺で悪かったな。ところで、お前体大丈夫か？」

「うん」

「そーか、まったく心配したんだぞー。お前の心臓付近触って見たら心臓は普通に動いてたけどさ」

は？今なんて？心臓付近、って胸？男に胸触られた？

「まさか、お前胸触ったのかー、このロリコン」

私は多分顔が真っ赤だったと思う、シヨウに殴りかかったが片手で止められた。

「やっぱりな、そんな反応するって事は……お前女だろ？」

「は、何を言ってる？」

「あー、言い直そう。お前元の世界で男だったっての嘘だろ。男だったらはじめの方はそんな反応はしないさ。まあ確かに器に合わせ心は変わってくけど1日やそこらで変わるなんてあり得ないしな」

「……いつから気がついていたの？」

「はじめっから、俺さ人の心が読めるんだよ」

「ふうん、なるほど。って、あつままだ私胸触った事許してないよ？」

げつつ顔をシヨウはする。私はそのまま言い続ける。

「一体どんな形で責任とってくれるのよ、こんな小さな女の子に手エ出すなんてこのロリコン、私がもしも、もしも」

あれ？止まらない？感情的になりすぎてコントロールが効かない。このままじゃとんでもない事を言ってしまうそう。

「お嫁に行けなかったらあんたが貰ってよね」

あー、言っちゃったー。多分今の私は顔が真っ赤を通り越して真っ赤っかなんじやないかと思う。しかもシヨウはすごい困ったような顔をしていた。

「あー、じゃあお前も早く寝るよなあー。お休みー」

あ、逃げた。

でも、心が読める人……か。あーあ、なんか明日嫌な予感するなあ。嫌な予感は当たるけどいい予感は外れるって言葉もあるし。私はすぐそばの海に向かって歩き出した。

「ラー……ラー、ラーラララー」

私はしばらく歌っていた歌っていたと言ってもうる覚えの音楽に合わせて適当にラーって言ってただけけど。

「綺麗な声だね」

不意に後ろからかけられた声に振り返る。その声の主は青年だった。

「ありがとう」

「もう少し歌っててくれないか？」

「うん」

そう言ってまた私は歌い始める。

第四話 この日生まれたサムライスタイル

翌朝 《レーナ編》

「さーって、昨日はティアちゃんのおかげでもう予定よりも早く目標1Vを達成できましたー」

わー、パチパチ。と効果音がでてそうだがあたりは静かだった。

「みんなテンション低くない？どーっしたのー？」

「どーっしたのー？と言われても、ティアはインザベットだしかみにはまた立ちながら寝てるしユーキは50度寝してるし」

50度寝って一体何時から寝たり起きたり繰り返してるのよっ、と突っ込みたかったが先に言いたい事があったので飲み込んだ。

「さて、今日はみんなの装備を整えたいと」

「僕は和服に刀で」

「かつこいい鎧があればなんでも」

「むにゃむにゃ、私はピンクのワンピース」

って、なんで装備の話始めた途端にみんな会話にはいるのよ。

「俺は・・・治療師だからそれっばければなんでもいいかな」

「うーん、とりあえず昨日のドロップ品の装備とか回復薬とか分配して余ったのは売ろうか」

「さんせー」

「えっと、分配するものはポーションが128個って多すぎ。それに短剣、名称は『ストライクダガー』。他には刀があるね、名称は『魔刀まとう鷹の翼たか』か、翼ってなのとおり軽いねー。後は・・・短剣、名称は『ステイレット』かー、短剣にしては長いねえー」

「よし、僕がその刀をいただこう」

そう言っただけでかみにゃんが刀を持っていく。

「私はこの短剣を」

ティアちゃんはストライクダガーを持っていく。

「じゃあ、俺これ持ってくから転職する」

そう言っただけでシヨウが持っていく。

「よし、街に装備を整えに行こう」

「「「「おー」」」」

ユーキの発言にみんなが賛成する。

《ユーキ編》

とりあえずいろいろとありますみんなの装備を説明しよう。

シヨウ

武器：ステイレット

頭：バンダナ

服：ローブ

かみにゃん

武器：魔刀 鷹の翼

頭：サングラス

服：デントラスの服

いわゆる和服(黒)

ティア

武器：ストライクダガー

頭：大きなリボン(赤)

服：ワンピース(ピンク)

レーナ

武器：キャンデルブロード

杖銃の一種で遠距離特化

頭：ガンナーキャップ

服：パーカー

ユーキ

武器：シヨートソード

頭：バンダナ

服：チエーンメイル

「よーっし、一通り揃ったな」

「うん、俺もこれでいいかな」

「ちょっとまってよかみにゃんそれ危ないんじゃない？」

そう言つてレーナさんが指差したのは刀身剥き出しのかみにゃんの刀だった。

「そうだなあ、そうだ知り合いに鍛冶職人がいるからそいつに鞆たもとを作ってもらおう」

「ん、その人つてこの世界の住民？」

シヨウが訪ねてきたので答える。

「まあな、前に危ないところを助けたんだよ」

「へー」

「ほら、あそこに水車が見えるだろ。その隣の家だ」

俺がそう言つてその家のそばまで行き家の扉を開けた途端に。

「ゆーっきー」

一人の女の子が俺に抱きついてきて俺はよろめき後ろの川にドボンッと水しぶきをあげて落ちた。

第五話 ダイヤモンドの全力疾走は意外に疲れる

《シヨウ編》

いきなりユーキに女の子が飛びつきそしてユーキはそのまま川へと落ちた。

「大丈夫かユーキ？」

俺が呼びかけると「大丈夫だー」と返事が帰ってきたので安心する。

「で、その子誰？」

「えっとー、ここの鍛冶屋の娘さん」

レーナさんの質問にユーキが答えると女の子は起き上がり自己紹介を始めた。

「始めまして、私は刀衣といと申します、それでいてユーキの許嫁いいなつけですっ
「

許嫁ですっと言う時にユーキの腕に抱きつく。

みんなが驚いていると「いや、許嫁じゃないから」とユーキの修正。

「えー、私の心はもう初めて出会った時からメロメロですよー」

「ユーキどんなテクだ？」

俺が聞くとユーキは

「テクなんかねえよ、ほら危ないところを助けたってのがこいつだっただよ」

「バリバリフラグ立てたねえ」

レーナさんがそう言っただけでティアを連れて鍛冶屋に入ってく。それに続いてユーキ以外のみんなが入る。

鍛冶屋の中はドラ エなどによくありそうな感じだった。

「おとーさん、ユーキきたよお」

と刀衣が言うと奥の方から大柄な人が出てきた。

「おお、いらっしやい。ってユーキびしょ濡れじゃねえか」

「あー、ちよっとね」

「ほれ、奥にタオルあるからそれ使え」

どうやら店主と思しき人は外見の割に優しい人のようだ。

「えーつと、今日はどんな用で？って見りゃ鞘が必要だって分かるか。おいおい、君が持つてるの魔刀じゃねえか」

店主がかみにゃんの刀を見て言う。

「あー、これね。魔物が落とした」

かみにゃんが刀を差し出しながら言う。

「で、これに合う鞘ってわけか・・・ん、その二人が持つてる短剣にも鞘が必要みたいだな。作っておくから待ってなさい」

そう言って店主は奥に行く。

「ねえねえ、ゆーきいーあそぼあそぼ」

刀衣はユーキの腕を降りながら甘えている。

「分かった分かった、じゃ外にでような」

「ねーねー、ていつちゃんも一緒に遊びたい」

ていつちゃんとは多分ティアの事であろう、その当のティアは武器を眺めている。刀衣はティアの手を引っ張ってユーキと一緒に外へ出る。

「さて、僕は寝るか」

そう言ってかみにゃんはそばの椅子に腰掛け。

「シヨウ君私達も行こっか」

「ああ」

外へ出ると刀衣はボールを持っていてユーキは棒を持っていた。

「野球かー、よっしゃー燃えて来たっ。ユーキかつ飛ばせ〜」

俺はそういいながらきてきとうなポジションへ走って行く。

「ふふふ、ゆーきいーに私のボールを打てるかなあ〜?」

「ふっ、あいにく生憎お子ちゃまに負けるような腕は持ってない」

「よっし、いつくぞー」

そう言っつて刀衣はモーションにはいる、そしてユーキも構える。

「覚悟っ、必殺殺人必中ストライクキラールボール」

「っつて、俺に当てて殺したいのかストライクを取りたいのか全くわかんねーツツコミどころの多い名前だな、おい」

「というか必殺と殺人とキラールの時点で3つは殺すつもりだし、しかも必中までもはいってる。死刑狙い確実だなwww」

「そう思っつて見てみると思ったとおりボールはユーキの顔面にまっしぐら。」

「あぶねー、ユーキ避けろっ」

「黙れ小僧っ、《ファイアースライド》」

《ファイアースライド》とは武器に炎を纏まとわせるスキルだ。スキ

ルの効果により炎を帯びた棒はしっかりとボールを捉えホームラン級の当たりを繰り出す。

「レーナさん、なんか吹っ飛ばす魔法かなんかで俺を飛ばしてくれ」

そう俺が走り出しながら言つと「おk」とレーナさんは言つて杖銃を取り出し構える。

「《エアースョット》フルパワー、チャージオンツ……はっしゃー」

《エアースョット》とはそのまま風を撃つ魔銃士のスキルだ。そのスキルにより出来た風にのり、俺はボールの落下地点まで行く。そして。

「きゃーっち」

レーナさんがそう言つて俺の手にはボールが収まっていた、が。急にボールが発火し俺は落としてしまった。なぜドベースの技が再現されてんだよ。

「おっしゃー、そんなだけとばせばどのみちランニングホームランだぜ」

ユーキはダイヤモンド（実際にはベースすらないが）を走つて言う。

「あいつ、おっとなげない」

それを見てレーナさんが言う。確かに飛ばしすぎだなあと俺も思う。

「うううううう」

あ、泣いちゃったか？そう思って近づくとすすむよ。

「ゆーきいーかっこいいよぉー」

と言ってまた抱きついていた。

第六話 処女の危機

「ゆーきいー、次は何して遊ぶのぉー？」

「そうだなあー、じゃあ」

とユーキが答えようとした時、【殺意】が感じられた。そう、俺は人の心が読めるからそう言った感情も感じる事ができるのである。

「ユーキ、刀衣を守れえー」

俺がそう言った直後、どこからともなく何か刀衣に向かって一直線に飛ぶ、がそれは突如間に現れたユーキの体の中へと消えた。

「ぐつつっ!？」

そう言っ腹を抑えるユーキの手は紅に染まっていた。

「敵？」

レーナが銃弾が飛んで来た方に杖銃を構える。

「ゆーきいー、しんじゃだよ」

「大丈夫、夫だ。これぐらい、魔法で、何とか、なる」

俺は急いでユーキに駆け寄り《ヒール》を唱える。しかし、傷が深すぎて回復が間に合わない。どんどん血が出てくる。俺は何度も《ヒール》を唱える内に銃弾が飛んで来た方から2人の男が現れた。

「やつべー、ミスっちまった。どーするーコウ？」

ライフルを持った男が尋ねる。

「キンダだからもう少し粘れと言っただろう」

黒い鎧に身を包んだ男が言う。

《ティア編》

一方その頃ティアはというと？

落ちたボールが転がって行ってしまったので追いかけていたところ当たり一面知らない所。

「迷子ナーーーーーーウ」

と叫ぶ少女、そうその少女こそティア。

「どこどこおー？みんなどこおー？」

まずい、そーとーまずい。というかなんで当たり一面雪景色なの？

どーしよーもなく歩いていると不意に後ろから肩を掴まれた。

「ひゃっ！？」

そう思わず声をあげてしまいつかんで来た者を見上げる。

「やあ、君一人かい？良かったら俺とぶへえ」

私が殴りその瞬間に少し距離をおく。

「ふ、なかなか痛いじゃないか、そういう風に嫌がるロリっついねえいいねえ最高だねえ」

まずい、こいつ変態だ。そう直感した。私は少しずつ後ろへ下がっていくが急に何かを掴みその場に倒れてしまう。

「いつ、たあ、なにこれ？」

それをよく見てみると骨の手だった。私はそれを見て恐怖に溺れた。

「ダメじゃないか、ロリにはあまり乱暴をしちゃいけないよ。ああ、こわがらせちゃったねえ、この子は僕のしもべさ」

こいつ、はつまりこの骨だろうと言う事は。

「死霊使い（ネクロマンサー）」

「あつたりい」

私が答えると男は指を鳴らし答えた。そして、急に私の上に覆いかぶさって来た。

やばい、処女の大ピンチ。

そう思っているいろと対処法を考えると一つの方法が思い当たった。それはまだ未使用のジョブのスキルを使用すると言う事だ。だ

がそのジョブの説明を見る限り、最悪命の危険まで伴うというが、この際かまってられない。私は使う事にした、そのジョブの名とは『羅刹使い（らせつつかい）』その一番初級のスキルの使用方法は自分の血を捧げる事だった。私は手を握りしめた、そして爪を手のひらにつきたて鋭い痛みとともにじわじわと血がにじむ。

「我が血を喰らいて我が前に降臨せん、出でよ死体喰らい（アン
デッドイーター）の暗黒魔よ^{グレンデル}」

私の血が地面に垂れ、そこから魔方陣が浮上する。そして、1匹の生物が姿を形成し始めた。

第七話 「あら、まあ」「はとある国の言語で」「アラマー」

《シヨウ編》

「さあて、どいつから葬り去ろうか」

黒い鎧の男が言う。俺はその時必死に頭を回転させていた。ユーキは今戦闘に出せない、かみにゃんもてんちようも呼びに行く暇な
んかない。ティアも何処かへ行ってしまうている。この状況で戦えるのは俺とレーナさんだけだ。おまけに二人とも後方支援型。まさかとは思うが刀衣が戦えるとも思えないが・・・一応聞いておくか。

「なあ、刀衣、お前どのくらい戦える？」

「うづく、私は、猫人だから、戦える、ゆーきいの為に戦う」

猫人か、だけど今武器を持つてるとは思えないジヨブを聞いておくか。

「ジヨブはなんだ？」

「私は、ドルイド魔法師とアサシン暗殺者ができる。お兄さんの短剣を貸して」

暗殺者としての能力は使えるな、よし、レーナさんにスナイパー狙撃手を抑えてもらって俺と刀衣で黒い鎧の男を倒す。

「刀衣、これを使うんだ。一緒に倒そう」

「うんっ」

刀衣は短剣『ステイレット』を構え黒鎧の男に向き直る。

「レーナさん、狙撃手を任せる。俺と刀衣で黒鎧の男を倒す。俺はシヨウ、こいつは刀衣だ」

俺が名乗ると黒い鎧の男が剣を抜き「コウだ」とだけ名乗る。

そして、刀衣がステイレットを突き出すように突進をする。かわされるがそれは想定内だ、俺がかわす方向の先回りし魔法を放つ。

「《ライトバタフライ》」

これは光の蝶ツチの大群が敵に飛びかかり少しのダメージと確率で短時間行動不能にする魔法だ。

「くっ」

コウがつめき声をあげるが無視をして攻撃をし続ける。

「せやっー」

刀衣が蝶に囲まれているコウにステイレットを突き出す。ステイレットとは本来突く事に特化している武器でその突き攻撃は凄まじい、それに猫人の速度、暗殺者の攻撃力が加わりコウの鎧を突き破り体に突き刺さる。

「くそっ、キндаとつとと済まして援護しろ」

俺が慌ててそいつと戦っているはずのレーナさんを見ると杖

銃は地面に落ち、フラフラしていた。そして

「とどめだぜ〜」

そう言っただけで、キンドが銃をレーナさんに向ける。そして引き金が引かれるか引かれないかという時になり。

「助っ人さんじよ〜」

和服姿に日本刀を持った男がレーナさんの前に飛び込み、飛んで来た銃弾をその手に握られた刀で真っ二つに斬る。

「かみにゃん」

「やあ、遅れて済まないねえ〜。主人公は最後に登場するものだからさあ〜」

「お前が主人公かどうかわからないが助かった、レーナさんを援護してやってくれ」

俺はコウを相手にしながらさういふとかみにゃんからこんな声が帰ってきた。

「おっつかもつすぐあのおっさんも来るからもうこっちの勝ちは確定さ」

「おのれえー、キンドひくぞっ」

「ああ、てめーらあーおぼえてやがれえー。サカスー!!!」

と捨て台詞を吐いて2人は森の方へ逃げた。

「かみにゃん」

「ああ、聞いたぞ」

「あいつら、出来るっ」

第七話 「あら、まあ」「はとある国の言語で」「アラマー」「（後書き）

サカスとはBi hazard5のアー イングが逃げる時に言った言葉で、あばよという意味です。サカスとはあくまでそう聞こえるというだけです。

第八話 悲しい時は歌えばいい

「って、二人とも追いかけないと」

レーナさんのその言葉で思い出す。

「あっ」

急いで追いかけないと、でもユーキが。

「ユーキをどうしよう」

俺がそう言った時に。

「おい、遅れてすまん」

あれは、店長だ。

「店長、ユーキが」

俺が言うと店長は。

「店長はよしてくれ、俺の名はラーケイクだ。イクとでも呼んでくれ。それにユーキは大丈夫だこの薬を飲ませればすぐにどんな怪我でも治る。大事な一人娘の夫を死なせるわけにゃいかんからな。お前たちは行くといいここは任せておけ」

「イクありがとう、俺たちは奴らを追いかける」

「ああ、そっだかみとやら、これを持ってけ」

そう言ってイクが差し出したのは一つの鞘と日本刀だった。

「この日本刀は天叢雲剣だ、今はまだ抜く事はできないが時が経てば抜けるようになる」

それを受け取ったかみにゃんは「サンキュー」とだけ言っただけで俺とレーナさんと一緒に走り出す。そして。

「私もゆーきいーの仇を取る」

そう言っただけで止めるイクを無視して一緒に来る。

「くそっ、あいつらどこ行った」

俺は少しキレてそう言うが奴らは見当たらない。くそ、できる事なら直ぐに発見して罾とかにかかるとか前には倒したかった。恐らく罾を仕掛けてあると思っただけで置いた方が良かったろうそう思いこの結論に至った。そしてその結論は数秒後に実現する。

「うわあー」

刀衣が地面に張られた紐に足を引っ掛け転んだ、何と古典的な罾！？と思いつつも突っ込んで暇はなかった。転んだ先は崖だったからだ。

「刀衣っ」

かみにゃんがぎりぎり腕をつかんだのは良かったんだけど今度は鉄球が飛んで来て2人ごと吹っ飛ばして行った。何という「デュアルトラップ」重畳。

「かーみにゃーん、だいじょうぶかあー？」

「なんとかなー」

と声が聞こえたので安心する。

「レーナさん、俺たちも気をつけないとな」

俺がそう言つてレーナさんが「うん」と返事をした時・ガチャ・と何かの効果音。レーナさんの足元をよく見てみると何かのスイツチを踏んでいた。

そして気がついた時には矢の雨が降っていた。

「うわああああ」

「きやああああ」

《刀衣編》

「ふう、お兄さんありがとう」

「いや、まあ人助けは当たり前だからねえー」

ふうん、この人は中々謙虚なんだなと思ったが。

「まあ、僕にかかればこんなもの余裕のよっちゃんだね」

と言いだめた。ゆーきいーは無事かな？などと考えながら私はゆーきいーに教えてもらった歌を歌いだめた。

「しょーしゆりきー、みんなだいすきー、しょーしゆーりきーぼくもすきー、といれとーおへやにー、しょーしゆーりきー」

と私が一生懸命歌っていると、お兄さんが急に笑い始めた。

「なんでその歌なんだよぉwwww」

えっ、何か恥ずかしい歌だったの？私はそう思ったがゆーきいーに初めて教えてもらった事だったので私は最後まで歌った。

第八話 悲しい時は歌えばいい(後書き)

最後の歌ですか？ええ、消力の歌ですわ W W W
一応歌詞載せておきます。

消臭力 みんな大好き
消臭力 ぼくも好き
トイレとお部屋に
消臭力

がんばらなくてもいいよ
ぼくがそばにいるから
消臭力

消臭力 みんな大好き
消臭力 ぼくも好き
トイレとお部屋に
消臭力

きみが笑ってくれるまで
ずっとそばにいるから
消臭力

消臭力 みんな大好き
消臭力 ぼくも好き
トイレとお部屋に

消臭力

泣きたいときは泣けばいい
ぼくがそばにいるから

消臭力

消臭力 チカラ強く

消臭力 前向いて

地球の反対から

消臭力

みんな同じ空見てるよ

あきらめないで N e v e r E v e r

ガンバロ―

消臭力

第九話 ディアトリマの騎士

私たちは、しばらくその場所に佇たたくんで沈黙していた。なぜなら私たちの前に1人の女性がいるからだ。その手には2mはありそうな長剣、そして騎士の様な鎧よろいに身を包んでいた。

「君はだれだい？」

お兄さんが尋ねる。すると女性は剣を構えながら答えた。

「私は、ディアトリマの騎士のユーティーだ、そしてこの剣は私の愛剣で魔剣オロチ大蛇だ、以後お見知りおきを」

そのあとにお兄さんも名乗り始めた。

「僕は、流離いの侍の桂峰 神紅だよ、そしてこの刀は魔刀鷹の翼さ」

お兄さんも名乗り刀を構えたので。

「わっ、私は猫人の刀衣です。えっとこれは借り物のステイレットです」

なんとというか、2人に比べて全然格好悪い自己紹介になっちゃったけどまあ良いよね？そう思っていると・・・カキーン・・・と金属がぶつかり合う音がして何事かと思ったら2人がもう鏢くわ迫り合あいをしていた。

「お前、中々の腕前だな。侍というのも侮れないな」

「お前こそ、騎士の割には結構やるじゃないか」

そうして、一箇所で開戦した。

《レーナ編》

「うぐぐぐぐ」

シヨウ君は踏ん張っていた、別に排泄物というわけじゃない。私のミスで落とし穴に落ちそうになった所私を助けようとして飛び込みまかろうじて片手で落ちない様に捕まってる状態だ。

どうしよう、このままじゃ二人とも落ちちゃう。わたしはどうすればいいか考えたが思いつかなかった。そうして、ある人の声が聞こえた。

「闇夜から降臨する闇のお」

「著作権の問題で登場を拒否しますっ」

とシヨウ君の声が遮る。

「そんなひどい、じゃあ邪悪の王じゃだめ？ねえかつちゃんはど
うっ」

そう言つとその人の後ろから小さな生き物が出てきた。

「ワタクシはそれでいいと思いますが」

「ソウネ、かつちゃんもそう言ってる事だし。さあて、ワルイコトするわよー。クライミングをしてるわ、よーし上に引き上げれば邪魔デキル。ワタシ悪事がデキル」

そう言つてその人が両手を前にかざすと浮遊間が来て私たちは地面に着地した。

「サンキュー、オウサマ落とし穴に引つかかって危なかつたんだ」

「ノーン、またやってしまったー」

そう言つて何処かへ行つてしまった。なんだったんだあの人？

《ティア編》

「ご主人様、およびただけて光栄っち」

「……………」

なにこれ、容姿はフェレットみたいで名前と全然違う。ええと、確かこんな時の為の対処法があつたはず。なんだつけたええと……
・そうだつ。

「ねえロリコンこの世界はクーリングオフとかあるの？」

と私が聞くと。

「ロリコンと言つのはやめてもらえないか、紳士と呼んでもらおうか」

そう言っつて、耳に息を吹きかけて来た。マズイ、気持ちが良いすぎて頭が変になりそうだ、しかもまだ吹いている。まずい、このままじゃ……。とまで行った所で。

「ご主人様から離れるっち」

そう言っつてフェレットが空中回し蹴りを顔面にヒットさせてなんと20mくらいも吹っ飛んで行った。

「それに、ご主人様クーリングオフしようとするなんてひどいっち、それにそんな制度むこうだっち」

はあ、やっぱりか。私は脱力したがこいつは見かけによらず相当強いんじゃないかと蹴りをみて思った。

「まったく、ご主人さ……伏せるっち」

私はその言葉を聞いて咄嗟に伏せた。すると直前まで私の顔があった所は何か巨大な腕の様な物が相当なスピードで通過して行った。

第十話 個々の戦

私は急いで後ろを振り返るとそこには、腐りかけている巨人がいた。アンデッザイアント死体巨人そんな物聞いた事ないよ。

「あれは巨人の死体を操ってるだけだ、だがあのサイズを操るなんて相当な使い手だ。ちなみに俺はあんなの操れない」

ロリコンの強さは知らないがこれはまずいかもしれないそう思ったが。

「ご主人様、僕にまかせるっち」

お？フェレットが勇敢に巨人に立ち向かって行く。そして、まあ多分10000倍以上はあるんじゃないかと思われる巨人の足元にフェレットが歩いて行き足に手をかけ持ち上げ、投げた。……って投げた！？しかもロット団の様にキラーンってなったよ。

「あいつの力は底なしか」

そう言うロリコンはいつのまにか真横に来ていて肩に手をかけていた。

「離せっ、このロリコン」

「だから紳士だってえ」

このロリコン、力が強くて今の私じゃ逆らえない。けどいまがフェレットがいる。

「フェレット助けてー」

と私が一度言うつと。

「ご主人様から離れるつち、でもご主人様、フェレットじゃないつち」

《シヨウ編》

「で、なんかいつのまにか追いついちゃったみたいだが」

「そうだね」

今俺たちの前にはコウとキンダがいる。しかもあいつらの顔の驚き様と来たら。

「何故、ここに・・・」

とコウが言ったので俺は。

「逃げ切れるとでも思ったか？」

「くっ、まずいよコウ。とにかく今は逃げよう」

そう言うつて2人が反対方向へ逃げようとしたらその方向から2人の人影が見えた。

「ユーキ、イク」

とレーナさんが言うつと。

「へへっ、心配させたな」

「さあて、逆転劇の始まりだあ」

これで実質 4 対 2 だ。俺たちの勝ちは決定的だ、そのはずだった。

「仲間がいるのはお前たちだけじゃないさ」

その声を聞いて見上げると 5 人の人がいた。

「テイー、2 人の回復を任せる。よし、ラック、コール、ペオル
俺たちでその 4 人を始末するぞ」

「「「おうっ「「「」

そうして、ペオルはイクと戦い、レーナさんはコール、ユーキは
ラック。そして俺は……

「さあて、こちらも始めようか？」

リーダーと思われるやつと戦闘だ。

《イク編》

つく、他のやつらの援護は期待できそうにないか。それにしてもペ
オルと言ったか。体に出ている鱗、それに紫色の翼。

「お前、竜人か？」

「そう言う事だ、行くぞっ 《半竜化》」

そしてペオルは竜のなりかけへと姿を変えた。これは俺も本気を
出さないとまずいな。

「では、俺も《野獣化》」

大柄な男は大きな熊へと姿を変えた。

「ほう、お前は熊か、だが竜には勝てないな」

ペオルが翼を羽ばたかせながら言う。確かに竜に熊が勝てるはず
がない、しかしあくまで力の話だ。熊には竜にない強さがある。

「ぎゃはははは、それじゃ熊にただいちゃおうかなあ」

「できるものならやってみろっ」

《レーナ編》

「コールって言ったわね、私はレーナよ。見ての通り魔銃士よ」

そう私が言うのとコールって人は頭をぱりぱりかいたあとに。

「僕、コール、ランサー銃師」

そう言って槍を構える。私はそれをみて本気でいっても負けると
思った。けど、時間さえ稼げれば他の誰かが助けてくれるはず。

《ユーキ編》

「俺はユーキ、魔法戦士だ」

「俺はラック、トランサー変身者だ」

変身者といえば、相当なクラスのジョブである事が分かる。まずいけど・・・負ける気はないっ!!。

《シヨウ編》

「名乗っておく、俺はシヨウだ。治療師をやっている」

そう言っただけ俺は拳を構える。武器がないのは辛いがそれでもやるしかない。そんな俺の気持ちを感じ取ったかどうかは知らないが、男は剣を俺の前に投げた。

「俺は、ゴウだ。剣を取れ、それが勝負開始の合図だ」

ゴウと言っただけはなかなか礼儀がなっている様だな。俺はそう思い、剣を取る、直後にゴウが距離を詰めて来る。

・・・カキイイイン・・・

金属同士がぶつかり合う音、俺は圧倒的に押されていた。

一瞬の鏝迫り合いの後、直ぐに距離を離す為にバックステップを取るがゴウはそのまま突っ込んで来る。上から振り下げられた剣を俺は剣を横に構え受け止めるがその勢いが強すぎて俺は後ろに吹っ飛び急斜面を転がり落ちる。

第十一話 外伝：消えた二つの灯火

「それでは2人とも目を瞑つむって下さい、私がいいと言つまで開けないで下さいね」

ティーがそう言うと2人とも目を瞑る。そしてしばらく時が立つたら「いいですよ」と声が聞こえたので目を開けると、そこにはティーの他にもう2人男がいた。そして大型のライフルを持った方が口を開く。

「よお、偽物さん方。俺たちのふりをしていて楽しかったかい？」

「ま、まさか本も……ぐはあ」

大型ライフルの銃口から出た光がライフルを持った男の頭を吹き飛ばす。

「うわあ、頼む。助けてくれ、この通りだ。金が必要だったんだ、娘が病気で薬が必要なんだ。この通りだ、見逃してくれ」

黒い鎧の男は土下座をする。もう1人大型のライフルを持ってない方の男が近寄る。

「そうか、娘の為に。それじゃあ仕方がない……なんて言うと思ったかあ？偽りさんよお」

男が頭を踏み潰す、その力があまりにも強く男の顔は砕ける。

「ひっ！？」

流石にそれはティーも怖がった。踏み潰した男は「ああすまない
な」とだけ言った。

第十二話 敵としての絆

「おにいーちゃん、まってえー」

1人の女の子が2人の男性に飛びつく。

「なんだ、……か。どうした？」

2人のうち小さい方が聞く。

「えっとねえっとね、アタシが2人のおにいちゃんのためにねお花の王冠作ったの」

そう言って、女の子が後ろにやっていた手を前に出すとそこには2つの花の王冠が握られていた。

大きい方が女の子の頭を撫でて言う。

「やっぱり……は優しいな」

それは決して戻って来るはずのない思い出。

いつてえー、頭打ったせいで少し気絶しちゃった。確か吹っ飛ばされて転がり落ちたんだっとな。

「ねえ、君大丈夫？」

その声がした方向をみると女の人が居た。そして少し離れた所にもう一人男がいる。

「ああ、すまない。けどここから直ぐに離れる、今ここは軽い戦場になってる」

俺がそこまで行った時に、ゴウの音が聞こえた。

「そこかぁー」

剣もつて上から飛んできた。まずいな今の俺じゃよける事はおろか受け流しすらできない。俺がそう思っている間にも距離は縮まってく。おわりか、そう思った時。

「たくつ、ミヤビさんの為じゃなかったらなんでお前みたいな奴助けるかよ」

ゴウの剣は男の剣によって遮られていた。助かった、のか？そこで急にまた頭が痛み出して俺の意識はなくなった。

《ミヤビ編》

「アサミ君、そこの人頼んだよ」

「わかりましたー、ミヤビさんの為とあらば」

こういう時にアサミ君は役に立つから助かる。私がそう思って気絶している人を運び出そうとしたら。

・・・パアーン・・・と何かが爆発する様な音がした。

「くそっ、撤退だ」

「あっ、てめっ逃げんなよ」

襲いかかって来た人はそう言って逃げて行ってしまった。しかしそれはとっても助かった。今はこの人が今どんな状況か確かめないと。

《刀衣編》

「凄い」

私は思わずそうつぶやいていた。ユーティーもお兄さんもどちらも恐るべきスピードだった。

「いくぞっ、《爆竜斬》はくりゅうせん」

魔剣大蛇から竜の形のオーラが複数出現しそれらが、お兄さんの方へ飛んでゆく。危ないっ！そう思うが。

「!？」

それらが零距离まで行った所で爆発しお兄さんが爆風に包まれる、あんなの零距离で当たったらただで済むはずがない。私は心配した

がそれは無用だった。煙が晴れていくとその中央に1人の男が立っていた。その男が片手に握られた刀を振ると付近の煙が散り、顔が明らかになる。うそっ、あんなのを食らって無事でいられるわけないのに、一体どうやって？

「ふはははは、はーっはっはっは」

急にユーティイが笑い始めた。なに、一体？まさか……発狂って奴ですか？こよこよ……、じゃなくって何故急に笑い出したんだろう。

「僕なんかギャグでも言ったかな？」

「違う違う、嬉しいんだ。ここまで強い奴と出会えて。今の《爆竜斬》は決して最高ランクの技とかまではないが弱くはない、寧ろ強い方だ。それを無傷で防ぐとは。私は君になら本気を出せる気がする。その際、騎士としての誇りは忘れ、全力でお前を潰しにかかる。君には私と互角、いやそれ以上の力がある事を期待するっ！！」

第十三話 抑制

「私の本気を君に全てぶつける、準備はいいかい？」

「いつでもかかって来なよ、僕は絶対に負けないよ」

「ふふ、それじゃあいくよ」

ユーティイは剣を横に持ちもつ片方の手を剣に添える、そして詠唱の様な物を始めた。

「我が期待に答え、その真の姿を晒せん。そして、その真の力を最高の敵にぶつけん。魔剣大蛇よ」

その直後、剣は何等分にもなった。そしてその別れた間に関節の様な物がつながっているのが見え、それが徐々に伸びていく、そして、まるで骨の様な形になりなおかつ自在に動く、長さは全長50mは言ってるであろうまるで大蛇の様な物だった。それが・・・魔剣大蛇の真の姿・・・。お兄さんがさっきよりも刀を強く握りしめる。

「さあ、私を楽しませてくれ」

ユーティイがそう言うのと剣を振りかざした、不規則な動きだったがお兄さんは刀で受け止める。が、受け止めた部分よりも先が急に曲がり先端がお兄さんの後ろへ回り込む。危ないっ、そう思うが遅かった。剣の切っ先がお兄さんの体を貫く寸前に。

「悠久蒼穹流 守式十之方 時雨且座匆」

お兄さんが刀で受け止めながらそう言うとお兄さんを中心に青い光がいくつも周りに現れ、それらがお兄さんの周りを回る。回転が早すぎてまるで青い球体に包まれているかの如くだった。そんな光に切っ先は弾かれる。

「ッフ、このシールドを破る事など不可能さ」

って、チート級の強さですか！

《ティア編》

「ぐぶほっ」

フェレットの蹴りがロリコンの腹部に直撃し吹っ飛ぶ。

「よし、フェレットよくやったあ」

「フェレットじゃないっち、グレンデルっち」

グレンデルか、じゃあっちっち言ってるから……

「ぐっちでいつか」

我ながらなんとまあ安易な決め方だと思った。が、ぐっちは。

「なんとも素晴らしい名前っち……。ところで、さっきからそこに隠れてるお前は何者っち？」

急にトーンを低くしてぐっちが言う、そしてすぐそばの木の影が

ら1人のおばさんが出て来る。

「ほー、私を見つけるたあ、なかなかもんでえ」

その人は骸骨を手に持っていた。

「いでよあ、我がしもべたちよあ」

おばさんがそう言うあたり一面からドラ エで言う、ガイッ兵がたくさん出て来た。しかしそれらのいくつかはぐつちが掃除する。しかし。

・・・イタイヨイタイヨ・・・

・・・マツクラコワイヨ・・・

・・・ダレカタステテ・・・

彼らの声だ、そう思った。死んでもなお、束縛され苦しむ・・・。そんなの・・・、そんなの・・・、酷すぎる。

「ぐつち辞めてっ！」

すると、ぐつちは急に消えた。

「ははは、馬鹿かそんなに使える召喚獣を自ら戻すなんて」

「私は、貴方たちを倒したいんじゃない。貴方だけを倒したい」

「やってみせるがいい」

前のは全力で放ったから全体に攻撃が言ってしまっただけ、力を抑えればコントロールできるはず。

「《霧鎌鼬》」

霧の刃が高速でおばさんの元に直撃する。しかし

「そんなんじゃ、村人にもかすり傷すら与えられないわよ」

そこには完全無傷なおばさんが立っていた。

第十四話 誘拐

「しかし、まあ。それなりに鍛え甲斐もあるってものね」

「はい？」

おばさんが急に姿が変わり、一人の女性となる。

「さて、自己紹介しちゃうか。私はテイラ、さっきのおばはんの姿は仮の姿、それで今の姿は真の姿のうちの1つでーっす」

「はあ？」

テイラと名乗った女性は、左手で頭をぼりぼりとかく。

「急すぎてわけがわからないんだが」

ロリコンが急に会話にはいる。

「えっと、じゃあ今から説明するから絶対に口を挟まないでね。いい？」

私とロリコンはコクコクと頷く。

「大昔に真の邪悪、全ての世界、この世界だけでなく貴方がいた『地球』までも破壊しようとした者がいた。しかしそいつは10人の勇者と10匹の竜によって封印された、私はその竜の内一匹。私のもう一つの真の姿が竜なの。そして、世界が危機に陥る旅勇者の生まれ変わりと竜により救われ、また全世界に危機が及んでいる」

「そして、私の主の勇者の生まれ変わり、ティア貴方に会えました。そして、さっきまでの戦いは貴方の力を図るためです」

「いまいちピンとこないけど私はその勇者になるって事なのだろうか？」

「理解していただけたようですね、これから貴方を鍛え上げます。そのための塔はあちらです」

するとさっきまでなにもなかったところに突然塔が現れた。

「あの塔の中で鍛え上げます、ついでにそこのロリコン、貴方もです」

とピシッとロリコンを指差した。

《ゴウ編》

「まっちつやっがっれ〜」

さっきの男が追いかけて来る。しかし無視する。さっきの爆発音は撤退の合図、早いとこ退散するべきだな。あの方を怒らせるとめんどくさい。俺は高速移動のスキルを使い撒いて仲間と合流しそのままティーの魔法で離脱する。

《刀衣編》

私が2人の戦いに見入っていると急に口を抑えられた。

「こいつでいいんだな、やっと見つけたぜ『力の創造主』よ」

何か葉を嗅がされ、そのまま私の意識はなくなる。

《レーナ編》

「助かった・・・の？」

圧倒的だった、全く叶わなかった。攻撃のキレ、瞬発力の良さとか、すべてが上回っていた。仮に私がノーコンじゃなかったとしても絶対に叶わない。私のノーコンぶりは恐ろしいほどだった。銃士や弓師だったときは普通だったのに魔銃士になった途端に全く当たらなくなってしまった。だから基本的に接射で戦っていて魔銃士本来の力がいかせていなかった。その本来の力が使えたとしても負けていただろう。

「おーい、レーナ大丈夫だったか？」

イクがこちらに向かって走りながら話しかけて来る。

「イクさん、一応大丈夫です。ユーキは？」

「俺も大丈夫だ、でもシヨウとかみにゃんと刀衣がない」

とユーキは困ったように言うが。

「僕はここにいるよ、刀衣は・・・連れ去られた」

とかみにゃんは言ってみんな驚いていたがイクだけが驚いていなかった。

「こころなる事はわかっていただき、刀衣は伝説の勇者達の生まれ変わりなのだからな」

「イクそれはどう言う事が説明してくれないか？」

とユーキが問うと「良いだろう」と言っけてイクは話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7775y/>

World of Fantasy 改訂版

2011年12月5日23時55分発行